

1)

担当：星野

題：医療関係者の COVID-19 予防接種プログラムの教訓

結論：予防接種により SARS-Cov-2 感染が劇的に減少した

原題：

Benenson S et al. BNT162b2 mRNA Covid-19 vaccine effectiveness among health care workers. N Engl J Med 2021 Mar 23; [e-pub]. (<https://doi.org/10.1056/NEJMc2101951>)

Daniel W et al. Early evidence of the effect of SARS-Cov-2 vaccine at one medical center. N Engl J Med 2021 Mar 23; [e-pub]. (<https://doi.org/10.1056/NEJMc2102153>)

Keehner J et al. SARS-Cov-2 infection after vaccination in health care workers in California. N Engl J Med 2021 Mar 23; [e-pub]. (<https://doi.org/10.1056/NEJMc2101927>)

Bradley T et al. Antibody responses after a single dose of SARS-Cov-2 mRNA vaccine. N Engl J Med 2021 Mar 23; [e-pub]. (<https://doi.org/10.1056/NEJMc2102051>)

本文：医療関係者は早期に COVID-19 予防接種を受けた。今回いくつかの医療関係者グループで予防接種の効果を調べた。

・イスラエルの医療関係者で、ファイザー製ワクチンを1回接種してから2週目に、COVID-19の週間感染者数が減少した。その後も感染者数は減少し2回目接種後は感染者数が少数にとどまっている。この効果はイスラエルで増えている変異株 B.1.1.7(イギリス株)に対しても同等であった。

・テキサス・サウスウエスタン医療センターの医療関係者において、2020年12月15日から2021年1月28日の間で、ワクチン未接種者の2.6%、1回接種者の1.8%で感染が生じたが、2回接種者では0.05%にしか感染しなかった。

・カリフォルニアの37000人の医療従事者で、少なくとも1回以上の mRNA ワクチン接種を受けた対象の1%が潜在的に SARS-Cov-2 検査陽性であったが、その感染者の71%は1回目のワクチン接種後2週間以内であった。2回接種を受けた28000人は、2回目接種後8日以上段階で感染陽性は0.05%しかいなかった。

・1 回目のファイザー社製ワクチン接種後 3 週間において、カンザスの医療関係者で最近 SARS-Cov-2 感染（または抗体陽性者）既往があるものは、非感染者に比べて SARS-Cov-2 抗原量が多かった。

コメント

この、イスラエル、テキサス、カリフォルニアの報告から、医療関係者の予防接種により SARS-Cov-2 感染が劇的に減少しているのがわかる。また、この結果は CDC の最近のデータと一致する。この世界的なデータは、ワクチンをためらう医療関係者に提示されるべきである。カンザスの報告は感染既往のある対象に予防接種を行うことで、抗体増幅効果があることがわかる。さらに免疫の質、防御力、抗体持続効果の面から、感染既往のある対象に 2 回接種を終えることを推奨する。感染既往のある対象にいつ予防接種を行うべきかについて、少なくとも 3~6 か月は再感染しないことからその間は待つ考えもあるが、症状が消失し感染が治まった段階でできるだけ早く接種するのが好ましいと思う。

2)

担当：小林

NEJM Journal Watch June 15, 2021 Vol.41 No.12

Family History of Colon Polyps Might Confer Excess Risk for Colorectal Cancer

題：大腸ポリープの家族歴は大腸癌の過剰リスクかもしれない

結論：特に 50 歳以下で大腸癌を発症した患者では、大腸ポリープの家族歴は強い関連がある

原題：

Song M et al. Risk of colorectal cancer in first degree relatives of patients with colorectal polyps: Nationwide case-control study in Sweden.

BMJ 2021 May 4; 373.

本文：大腸癌の家族歴をもつ者は大腸癌の発生リスクが高く、より重点的なスクリーニングが必要になる。では、大腸ポリープの家族歴をもつ場合は、大腸癌発生リスクが高くなるのであろうか。これには結論が出てない。今回、研究者らはスウェーデンのデータを用いて研究を行った。対象は、68000 名の大腸癌患者群と 333000 名のコントロール群で平均年齢は 63 歳であった。遺伝性大腸癌、炎症性腸疾患の患者は除外した。大腸癌を家族歴にもつ群では、一親等以内に大腸ポリープをもつ可能性が高く (8.4%) で、コントロール群は 5.7%、オッズ比は 1.4 であった。この大腸ポリープの家族歴と大腸癌リスクの関係

性は 60 歳以下で診断された場合でより強い(オッズ比 1.8)。さらに 50 歳以下で大腸癌と診断された患者では、大腸ポリープの家族歴は顕著に高く、オッズ比 5.27 となる。2 名以上の一親等が大腸ポリープをもつ患者では大腸癌リスクは 1 名の場合より高くなる。

コメント(Bruce Soloway, MD)：強い大腸ポリープの家族歴は大腸癌スクリーニングを早い段階(50 歳以下)で開始する、あるいは頻度を増やす理由になり得るだろう。